

## 英彦山の地理と歴史

佐々木英治（福岡県高体連登山専門部OB）

### はじめに

英彦山は古来神仏が宿る山であった。太陽神である天照大神の子、天忍穗耳命あめのおしほみのみことが英彦山北岳あまくだに天下ったという伝承があり、日の御子の山、すなわち日子山と呼ばれた。やがて「彦山」と書くようになり、江戸時代の享保14年（1729年）には靈元法皇より「英彦山」と表記するようお許しを戴いた。

また、英彦山のことを一般に「英彦山三千八百坊」と言ったりする。これは英彦山の山域に三千人の山伏やまぶしやその家族達が住み、その坊舎ぼうしやが八百あったという意味である。坊舎とは山伏の住まいで、修行道場兼参拝客の宿泊所のことである。こうした宗教の山は日本各地にあるが、山形県の出羽三山、奈良県の大峰山、そして英彦山は「日本三大修験道場」とされてきた。

こうした由緒ある英彦山とは、どういう山であるのか、様々な方面から説明をしていきたい。

### 1 英彦山の概要

#### (a) 地形

英彦山は福岡県と大分県の県境にそびえている。旧国名で言えば豊前国、筑後国、豊後国の三国にまたがっている山域である。詳しい歴史は後で述べるが、英彦山神宮の前身、英彦山靈仙寺りょうせんじは鎌倉時代には七里四方（一辺約30km四方）に及ぶ広大な領地（寺領）を持っていた。江戸時代になると寺領は削られたが、



英彦山遠望

山頂から半径5km程度の地域は英彦山領であった。そのため現在でも、福岡県、大分県の英彦山付近は県境未定地域となっている。ぜひ、地形図で確認してもらいたい。

また英彦山は巨大な分水嶺でもあり、福岡県側の北斜面に降った雨は遠賀川おんがかわとなって玄界灘に、あるいは今川となって周防灘に注ぎ、大分県側の南斜面に降った雨は筑後川となって有明海に、あるいは山国川やまくにがわとなって周防灘に注いでいる。

山容の概略を言えば、北斜面は比較的なだらかであるが、南斜面は急峻で生活に適さない。従って、古来集落は北斜面に集中し、南側は裏英彦山と呼ばれて人跡のまばらな地域である。東は犬が岳くぼてさん、求菩提山がくめきやま、西は岳滅鬼山、釈迦岳と千メ

ートル程度の山並みが連なっている。

英彦山の本体は中岳（1,188m）、北岳（1192m）、南岳（1199.5m）の三峰であり、付属するピークとして上仏来山（685m）、黒岩山（878m）、障子ヶ岳（948m）、鹿の角（1071m）などがある。英彦山の東は鷹ノ巣山に、西は岳滅鬼山へと続いている。鷹ノ巣山は西から一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳という三つのピークからなる。



英彦山中岳

英彦山の溶岩台地が侵食されてできたビュートの山で、国の天然記念物である。最高峰は三ノ岳（990m）で、一ノ岳（979.3m）には三角点がある。また、岳滅鬼山（1036.7m）は福岡、大分県境にある山で、県境尾根をたどって釈迦岳、大日岳と山並みが続いている。



鷹ノ巣山（一の岳）

### （b）聖地と俗地

北九州から英彦山に向かうと田川市に入った辺りから、地平線に英彦山三峰が突出し、その左手に鷹ノ巣山の三つの突起が並んだ印象的な景観が現れてくる。この特異な山容を持つ英彦山を、昔の人々は神宿る地として崇拝し信仰の聖地とした。英彦山では、聖なる地域と俗なる地域は、四土結界しどけつがいと呼ばれた目に見えない線で区別されていた（後述）。聖なる地域では信仰や修行以外の人間の営みは禁止され、田畑を作ることもできなかった。結界の下の地域は「英」の文字をつけずに「彦山」と表記し、結界から上の地域は「英彦山」と表記していた。その名残は今でも残っていて、彦山川や彦山駅は「英」の字をつけずに表記している。



銅鳥居

国道500号線に沿って上っていくと銅鳥居かねのとりいに着く。ここから上が、かつての聖なる地域で、英彦山神宮の正殿奉幣殿ほうへいでん

まで約1キロの参道「桜の馬場」が一直線に上っている。参道の両側には、昔は坊舎ぼうしやと呼ばれる神道・仏教・修験道の宗教施設が集中し、英彦山信仰の中心地であった。明治初期の「坊中屋敷図」によると参道の右側に二筋、左側に二筋の通りが並行し、百を超える坊舎が立ち並んでいた。江戸時代にはもっと多くの坊舎がひしめいていたという。明治時代になって坊舎はさびれ、禁制も消滅してほとん

どの坊舎跡が水田になったが、現在は過疎の影響で稲作をする人がいなくなり、草が生い茂った平地だけが夢の跡のように残っている。

### (c) 集落

上の地域にあった山伏集落を「英彦山十谷」と言った。すなわち、①上<sup>かみりようぜん</sup>霊仙谷・②五つ谷・③南谷・④中尾谷・⑤中谷・⑥智室谷・⑦玉屋谷・⑧別所谷・⑨下谷・⑩西谷である。江戸時代の文化4年の坊舎の戸数を見ると、①～④（この四つを総称して上谷という）に66戸、⑤26戸、⑥17戸、⑦22戸、⑧29戸、⑨56戸、⑩39戸、合計255の坊舎が山内にあった。このほとんどすべては現在消滅して、わずかに石垣のみが残っている。大会コースを歩きながら、往時の繁栄を思い浮かべてほしい。

上の地域に例外として俗人が住むことを許された場所が「彦山町」<sup>ひこさんまち</sup>（単に町とも言う）であった。現在でも参道の中程に土産物店が向かい合っている場所があるが、ここは江戸時代に豊前小倉藩主の小笠原氏が作った商業区域の名残である。英彦山の聖域の中で唯一土産物の販売や、歌舞音曲が許された地域であった。この彦山町は、伊勢神宮の「おかげ横丁」のような機能を持っていた。

下の地域には、北坂本、南坂本<sup>がら</sup>（唐ヶ谷を含む）の二つの俗人集落があった。この二つの坂本は文字どおり「坂」の下に位置しており、農民や鍛冶屋や大工・左官などが居住していた。結界から上に住む人々の食糧や生活必需品の補給基地として重要な役割をになっていた。もう一つの重要な役割は、上の地域に住む宿坊および町屋の女性達の産所となっていたことである。

### (d) 比叡山との共通点

英彦山は遠い時代から天台宗の修験道場として栄えてきた。そのためか、天台宗本山の比叡山との共通点が見いだされる。例えば、山麓の「坂本」という地名だが、比叡山の琵琶湖側登山口にも、同じ地名が見られる。また英彦山南坂本からの参道の入口付近は「雲母坂」<sup>きららざか</sup>と呼ばれるが、この地名も比叡山と共通している。



英彦山神宮奉幣殿

さらに英彦山神宮の正殿奉幣殿（かつての英彦山霊仙寺大講堂）は比叡山の根本中堂とほぼ同じ標高に建てられている。（奉幣殿 715m、根本中堂 670m）

### (d) 産業

江戸時代までの英彦山の産業は歴史の項で述べるとして、現在の英彦山の産業について簡単に触れておきたい。山伏集落衰退後の英彦山は英彦山神宮と美しい自然環境を目玉とした県内有数の観光地だった。国鉄彦山駅前や山内の「町」<sup>さんない</sup>には旅館が軒を連ね、企業の保養所もたくさんあった。昭和30年代には年間の観光客が20万人を越えていたというデータが残っている。しかし時代の流れとともに、人々の関心は派手で豪華な観光地に向かい、神社や古寺、修験道遺跡、山中の古道といった、もの静かで渋い英彦山の味わいは好まれなくなった。現在営

業している旅館は一軒しかない。

最近になって、こうした古いものへの好尚がもどりつつあり、マスコミでもしばしば取り上げられている。現在添田町や英彦山神宮を中心として、かつての賑わいを取り戻そうという試みがなされている。参道の右手には 2005 年（平成 17 年）にスロープカーが開通した。

大会に参加する方々は、英彦山の山中に静かに眠っている古い文化の香りに、ぜひとも触れていただきたい。

## 2 登山道

### (a) 垂直の道

国道 500 号線ができる以前、肥前（長崎、佐賀県）や筑前、筑後（福岡県）からの英彦山詣での旅人は、小石原経由で貝吹き峠を越え、汐井川でみそぎをして身を清めた後、対岸の南坂本に渡り、雲母坂、唐ヶ谷、銅鳥居を経て英彦山霊仙寺（現奉幣殿）に参拝した。また豊前方面からの人々は、豊前梶田の一宮から北坂本を経て霊仙寺へ、あるいは BRT の彦山駅付近から別所河内経由で北坂本へ、または津野の宮野から北坂本へ上がった後、別所谷を経て霊仙寺に参拝した。このうち、宮野からの道は現在九州自然歩道に指定されている。他には、<sup>はらいかわ</sup> 祓川を<sup>さかのぼ</sup> 遡り伊良原<sup>いらはら</sup>経由で豊前坊に上がる道もあった。



雲母坂

奉幣殿から急な石段を上ると、下宮、中宮、<sup>むすひ</sup> 産霊神社（行者堂）を経て中岳山頂の上<sup>じようぐう</sup> 宮に達する。これは通称「<sup>なかみち</sup> 中道」と呼ばれ、古来英彦山の幹線である。この中道に沿って登ると、三つの結界線を越えて四つの土地を踏んでいくことになる。初めの結界線は銅鳥居で、ここから下は<sup>ほんせいどうきよど</sup> 凡聖同居土と呼ばれ、俗人・凡人と聖者がともに同居している土地。銅鳥居から上は<sup>ほうべんじようど</sup> 方便浄土と呼ばれ、修行者が住む仮の浄土。奉幣殿の上の石の鳥居を越えると<sup>じつほうしやうごんど</sup> 実報莊嚴土と呼ばれ、修行専念の<sup>ぼさつかい</sup> 聖域で菩薩界とされた。さらに産霊神社の上の木<sup>じようじやくこうど</sup> の鳥居を越えると常寂光土と呼ばれる永遠絶対の浄土、すなわち仏界に至るとされ、唾を吐くことすら禁じられていた。

かつて、産霊神社から上は千本杉と呼ばれる杉の巨木の森で、「常寂光土」にふさわしい神秘的な場所であったが、平成 2 年の台風 19 号でほとんどの杉が倒れてしまい、現在は白骨化した巨木が立つ草原地帯になっている。かつての神秘的な森が復活するには数百年の時間が必要であろう。現在中岳山頂では上宮の再建工事が行われて



産霊神社（行者堂）

おり、産霊神社より上は立入禁止区域となっている。中岳から北岳を通過して高住神社へ、また中岳から南岳を通過して鬼杉へと登山道が延びている。

## (b) 水平の道

### ① 上の古道

上記の縦の道とは別に、奉幣殿から西へ水平に延びる古道がある。それは英彦山西斜面に広がっていた宿坊の集落や修行の岩窟を繋ぐ道である。この道は歴史の項で後述する回峰行の重要な道であった。大きく分けると上の古道と下の古道の二本になるが、この二つの道に挟まれた地域には、いくつかの宿坊遺跡が残され、多くの窟や奇岩があり、神仏が祀<sup>まつ</sup>られた聖地となっている。

上の古道は奉幣殿から石段を上り右折して入る道で、しばらく進むと「九大生物学研究所」の分岐が見えてくる。この分岐のすぐ下には、歴代の英彦山座主であった高千穂家の立派な墓所が見える。分岐を右折して下って行くとかつての英彦山座主院（現九州大学生物学実験施設）に至るが、この谷は金石谷と呼ばれ、英彦山座主に仕えた家臣達の屋敷跡が残っている。

「九大生物学研究所」分岐を直進すると、やがて智室谷遺跡<sup>ちむろだに</sup>が現れる。智室谷は江戸時代まで多くの坊舎があった場所で、現在でも坊舎跡の苔むした石垣が往時の息吹を伝えている。智室谷遺跡のすぐ上には巨大な智室窟があり、すぐ下には学問神社とも呼ばれる文殊窟がある。



文殊窟

智室谷の先で道は二つに分かれる（大会で「三鈷峠分岐」と呼ぶ地点）。地形図を見るとこの地点に墓地の記号を見付けることができる。この尾根は古くから修験者やその家族の墓地があった場所で、現在でも江戸時代の年号を持つ墓石がたくさん立っている。

三鈷峠分岐から左に行けば、梵字岩<sup>ぼんじいわ</sup>、四王寺谷、三鈷峠<sup>さんこうげ</sup>、大南神社<sup>おおみなみ</sup>を経て鬼杉に至る。これらはいずれも重要な修行の場であった。例えば室町時代に作られた能楽の曲に「花月<sup>かげつ</sup>」という曲があるが、主人公の花月は英彦山で天狗にさらわれて全国を放浪する。花月は過去を振り返って「英彦山の四王寺に深い思いがある」と語るが、これは四王寺谷に少年僧たちの教育を行う施設があったことから来ている。四王寺とは衣が池付近で、こんな山深い場所に学校があったのか驚かすにはいられない。また三鈷峠は密教の修法に用いる仏具の三鈷杵<sup>さんこしよ</sup>に由来する地名で、やはり山伏の修行場であったことを意味している。梵字岩や大南神社では現在でも時折、山伏の方々の読経の声が聞こえてくることがある。



能楽「花月」

さて、「三鈷峠分岐」を右に行けば、玉屋谷、玉屋神社に至る。玉屋神社に出る前の谷を玉屋谷という。ここは英彦山の開山伝承がある最も古い修行の場であ

る。伝承によるとこの地に中国北魏の善正ぜんしやうという僧が渡来し英彦山を開いたという。継体天皇の御代とされるから6世紀の初めで、仏教渡来以前になる。善正については事実確認ができないが、この玉屋谷遺跡は平安時代以降英彦山修験道の中心地であった。玉屋谷を下ると、泉蔵坊を初めいくつもの坊舎の跡を見ることができる。

玉屋谷から尾根を一つ越えると玉屋神社に出る。玉屋神社は巨岩の下にはめ込むように拝殿が建てられている。ここは英彦山四十九窟のうちのひとつ般若窟はんにやくつである。この道は玉屋神社からさらに尾根を越えて鬼杉に至る。



玉屋神社（冬）

### ② 下の古道

下の古道は旧英彦山座主院跡ざすいん（現在は九州大学彦山生物学実験施設）の入口脇から山腹を縫って上仏来山分岐を通り、大きな沢を渡渉した後、尾根を越えて玉屋神社へ至る。大まかにいえば、前述した金石谷、智室谷、玉屋谷の三つの山伏集落遺跡の上辺が上の古道で下辺が下の古道ということになる。それぞれの集落の真ん中には上と下を繋ぐ通りがあったようだが、いずれも谷沿いにあるため、度重なる大雨で無残にえぐられ、所々にかつての石畳の跡が残るに過ぎない。

下の古道に入りしばらく行くと金石谷で木の橋が架かっている。その先から右上へ座主院跡へ至る細い道が延びている。直進するとまもなく上仏山分岐である。この分岐を右折すると戦国時代に英彦山の僧兵達が立て籠もり、大友宗麟軍と対峙した上仏山に至る。直進すると大きな沢に出る。沢の渡渉後右折すると大南林道の汐井川駐車場に出る。直進すると玉屋谷遺跡を経て玉屋神社に至る。

### ③ 豊前坊参道

今度は目を英彦山北斜面に転じてみよう。英彦山の北斜面は標高 800m 程度のなだらかな高原地帯になっている。この高原の真ん中に「彦山町」から豊前坊高住神社まで参道が延びている。この参道に沿って国道500号線が走っている。現在九州自然歩道になっているこの道を東に行くと、別所谷を抜け、バンガローが建ち並ぶ英彦山野営場を過ぎ、「スキー場」と呼ばれる広い茅原に出る。ここは屋根を葺く茅の供給地として村の入り会地いりあいちであった。参道はスキー場、英彦山青年の家を経て豊前坊高住神社に至る。



スキー場（秋）

なお、スキー場から尾根伝いに中岳に至る道がある。この尾根は北西尾根と呼ばれ、自然林が美しい尾根であるが、現在は上宮工事用資材の運搬用モノレールが設置され、通行することが



豊前坊（高住神社）

できない。

#### ④ 裏英彦山道

豊前坊高住神社のさらに東側の薬師峠から、裏英彦山道と呼ばれる道が延びている。この道は英彦山の南東斜面、南斜面を巻いていく道である。ほとんどが原生林に覆われ、動植物も多様で深山幽谷の趣があるすばらしい道である。北岳分岐を過ぎ、苔むした岩石地帯といくつかの尾根を越えていくと、ケルンの谷に至る。



裏英彦山道（秋）

ここから右折すると中岳と南岳のコルに出る。直進すると鹿の角の下を巻き、籠水峠こもりみずを経て鬼杉に至る。

また、籠水峠から南に下ると、1044ピークや石楠花しやくなげの頭あたま（1020 m）を越え岳滅鬼峠がくめきとうげに至る。この道は英彦山山伏が春峰の峰入り（後述）に使った道である。

#### ⑤ 県境の道（峰入り古道）

英彦山は遠賀川の源流の一つであるが、最も奥深く県境付近まで食い込んでいるのは汐井川である。この川に沿って大南林道が延びているが、569m 地点で汐井川を渡り黒岩山と障子ヶ岳の間を抜けて岳滅鬼峠へ至る道がある。峠には「従是北豊前國小倉領（是より北、豊前の國小倉領）」と書かれた古い石碑が建っており、この道が日田へ抜ける古道であったことがわかる。岳滅鬼峠から右折すると峰入りの古道に入る。この道は、福岡、大分県境の痩せた稜線をたどり、岳滅鬼岳（1040 m）、岳滅鬼山（1036 m）、宝珠山（869 m）、釈迦ヶ岳（844 m）を経て研石峠きりいしとうげに至る。

### 3 大回峰と峰入りについて

今回の登山大会のコースは、いずれも古い歴史を持った修行の古道である。比叡山や熊野古道において、連日山をめぐる回峰修行が行われているのは、テレビなどでもしばしば報じられるが、英彦山でも同様の修行が行われていた。

英彦山ではこの修行を大廻行おおめぐりぎようと呼んだ。これには内廻路うちめぐりみちと外廻路そとめぐりみちの二つのコースがある。前者を小修尾しょうしゆび、後者を大修尾だいしゆびと言った。

内廻路は現在の地名で言えば、奉幣殿→英彦山青年の家→高住神社→一の鷹巢→薬師峠→北岳→中岳→南岳→大南神社→梵字岩→玉屋神社→下宮→奉幣殿という約 13km のコースである。山伏達はこれを単に登山として歩くのではなく、コース内に 74 箇所箇所の修行場所を設け、読経や拝礼を行いながら一日がかりでこれを廻った。

外廻路は内廻路のはるか外側を廻る約 30km のコースであるが、今となっては不明の箇所がほとんどである。わずかな資料から推定すると南は三国境、西は南坂本の先の鍛冶屋付近、北は赤村の焼尾峠、東は山国川源流部の標高 591 m 地点（苜又山の北方 600 m 地点）となる。これを結ぶと広い長方形の土地となるが、これが江戸時代の英彦山靈仙寺領であったという説がある。

こうした頻繁に行った回峰修行とは別に春峰（宝満山往復）・夏峰（宝満山往復）・秋峰（福智山往復）と呼ばれた三季入峰修行があった。このうち春峰について詳しく見てみよう。このルートは研究者や登山家によってほぼ再現されている。令和4年には、登山家の田中陽希氏が英彦山神宮の高千穂有昭禰宜等に先導されてこのルートをたどる番組がNHKから全国放送された。（「につぼん百名山」九州の霊峰・英彦山へ～修験の道”峰入り古道”～）

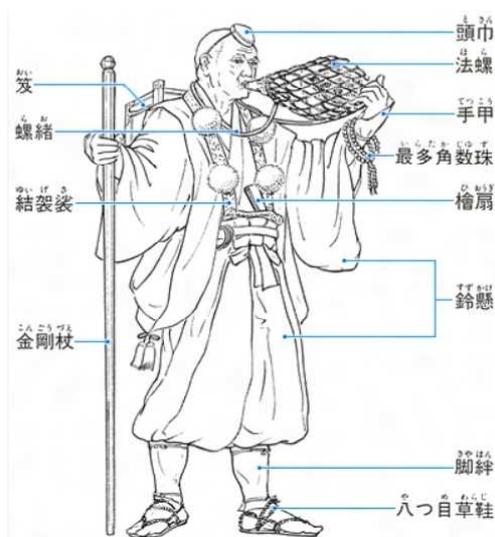
春峰は2月15日から4月10日の55日間かけて行われた。まず英彦山山中での1ヶ月近い修行の後、籠水峠→岳滅鬼峠→深倉峠姥が懐→釈迦岳→大日岳→小石原の行者杉→小石原盆地北辺の尾根道→嘉麻峠→馬見山→古処山→大根地山→宝満山と進んで行った。帰りは平地の里道を歩いた。峰入り修行は、ただ山道を歩くだけでなく、不眠不休に近い修行を連日行いながら山を歩き、食事は一日に手のひら一杯の米だけで、体力の限界の中で煩惱を拭い去り、即身成仏（生身のまま仏に成る）を目指したという。しかしあまりの厳しさに命を落とす者もいた。途中で亡くなった人は石小積という方法で埋葬された。馬見山に登る途中の「ハンドウ仏」はそうした山伏の塚であり、三季入峰のルート上には何カ所か石小積の伝承を持つ塚が今に残っている。

春峰のルートは今回の大会コースと一部重なっている。古の修行者が命を懸けて歩いた古道を体感してほしい。

## 4 英彦山の歴史

### (a) 修験道と山伏

英彦山の歴史を学ぶには修験道や山伏についての知識がどうしても必要になる。初めに簡単に説明しておきたい。まず修験道とは我が国の山岳信仰の一形態である。原始以来日本人は、山を祖霊が住む聖なる場所とも、魔性の者が住む畏怖の対象とも考えて信仰の対象としてきた。これに仏教の密教（天台宗・真言宗）的要素が習合して修験道は成立した。修験道の修行者を山伏という。山伏は、超人的な体力と精神力、そして験力げんりょくと呼ばれる超能力を獲得するため山に籠もって厳しい修行を行った。修験道



山伏「コトバンク」より

の修行の山は東北では出羽三山、関東では富士山・相模大山・日光山、中部では越中立山・白山・戸隠山、四国では石鎚山、関西では熊野三山・金峰山・大峰山、中国では伯耆大山、九州では英彦山・宝満山・求菩提山など、全国に六十五峰を数える。

さて、英彦山は奈良時代以前から非常に長い歴史を持っており、詳しく述べると途方もない量になってしまう。ここでは、英彦山登山で知っておくとよいと思われる最小限の事項のみを精選して簡潔に述べることにする。

## (b) 奈良時代以前

中国北魏の僧善正ほくぎ ぜんしやうやその弟子忍辱にんにく ふじやまこうゆう（俗名藤山恒雄、一説に藤原とも）による開山伝承や、役小角えんのおづのによる開山伝承、あるいは宇佐弥勒寺別当の法蓮による中興伝承が伝わっているが、最新の研究によれば、これらの伝承は、英彦山の起源を仏教伝来以前に置きたいという中世（鎌倉、室町時代）の創作と考えられている。しかし、出土品などから奈良時代以前から英彦山が信仰の場であったことがわかっている。モデルとなった人物もいたのかも知れない。



役小角像

## (c) 平安時代

「彦山」（この時代はまだ「英」を付けずに表記）の名が史料に初めて見えるのは、『本朝世紀』の嘉保元年（1094年）の項で、彦山の衆徒しゆと（僧兵）が大宰府に強訴し、長官の藤原長房は京都に逃げ帰ったという記事である。平安末期は奈良興福寺や比叡山の悪僧が権勢を振るっていたところで、彦山でもすでに強大な寺院勢力が存在していたことがわかる。また、養和元年（1181年）には後白河法皇によって京都新熊野社の荘園として彦山が指定されている。

## (d) 鎌倉、南北朝時代

本地垂迹説が流行すると、彦山南岳は釈迦如来が伊邪那岐命いざなぎのみこと すいじやくとして垂迹した俗体岳、中岳は千手観音が伊邪那美命いざなみのみこと によたいとして垂迹した女体岳、北岳は阿弥陀如来が天忍穂耳命あめのおしほみのみこと ほつたいとして垂迹した法体岳（仏の形の山）であると考えられるようになった。垂迹とはインドの仏が日本の神の形を取って現れることで、こうした神を権現と呼ぶ。これを彦山三所権現さんじよごんげんと言い、この後長く彦山の信仰の形となっていく。また鎌倉時代に書かれた『彦山流記』によれば、山腹には壺仙寺りやうせんじがあり、これを取り巻く多数の寺院や庵に400人に及ぶ僧侶が修行していた。宗旨は天台宗であったが修験道の修法はまだ記録にない。その領地は七里四方に及び、守護に租税を納めなくてよい権利「不輸権」を保持していた。

南北朝時代の正慶2年（1333年）に後伏見天皇の皇子安仁親王やすひとしんのうを彦山座主に迎えた。親王は僧となって助有法親王と名乗った。しかし妻帯の座主は女人禁制の彦山には住むことができず、筑前国黒川（現、福岡県朝倉市黒川）に黒川院という御殿を建てた。以来座主は世襲制となり、現在の高千穂宮司家に続いている。この黒川院は江戸時代まで続いた。

## (e) 室町、戦国時代

室町時代には彦山の修験道が確立し隆盛期を迎えた。七里四方の寺領を「七里結界」とし、結界内の村々には大行事社（高木神社）を鎮守神として配置した。現在でも福岡県筑後地方や筑豊地方に大行事という地名や高木神社を多く確認できるのは、この名残である。山伏達は修験道系の「行者方ぎやうじやかた」、天台仏教系の「衆徒方しゆとかた」、神道系の「惣方そうかた」に分かれ、それぞれの神事や仏事を執り行った。修験道で最も重要な入峰（峰入り）も行者方によって春・夏・秋の三季実施されるようになった。また不輸権に加えて不入権も獲得し、北部九州の一大宗教勢力となっていた。研究によれば英彦山の寺領の石高は4,000石から4,500石くらいで

あったとされる。

しかし、戦国時代になると佐賀の龍造寺氏や、豊後の大友氏が彦山を己の陣営に取り込もうとし、これを拒んだ彦山側との戦いが起こり、山内は焦土と化した。彦山座主が彦山防衛のため彦山に座主院を築き、黒川から移ったのはこの時期である。座主院跡（現在九大生物学実験施設）の壮大な石垣に往時を偲ぶことができる。

天正 15 年（1585 年）に豊臣秀吉の九州征伐によって九州は平定された。秀吉は七里結界の荘園を没収し、彦山は一時非常に窮乏したが、江戸時代になると徳川幕府によって、不入権や九州一円に檀家を持つことを認められた。また豊前領主となった細川氏、肥前領主の鍋島氏、筑前領主の黒田氏などの庇護を受け、再び繁栄の道を歩み出した。細川忠興はただおき霊仙寺大講堂（現在の奉幣殿）、鍋島直茂はしもみや下宮とじょうぐう上宮の拝殿、その子の勝茂はかねのとりい銅鳥居を建立奉納している。

### （f）江戸時代

彦山は平安時代以来京都しやうごいん聖護院の末寺という扱いであったが、聖護院を相手に訴訟を起こして勝訴し、元禄 9 年（1696 年）に幕府から「天台修験別格本山」として公認された。寛文 11 年（1671 年）には小笠原氏が門前集落のほぼ中央部に町屋五十軒の「彦山町」を新設した。宿屋や商店の他芝居小屋まであり、参拝客の息抜きの場としてたいへん賑わったという。宝永年間（1704-1711 年）に彦山の人口は最高に達した。坊舎や庵室の数は 557、僧俗併せた総人口は 3,015 人という記録が残っている。

享保 14 年（1729 年）には霊元法皇より「英」の字を賜り、以後英彦山と表記するようになった。この頃が英彦山の最も栄えた時期である。

英彦山が栄えた理由の一つとして豊かな経済力が考えられる。江戸時代の英彦山領は戦国時代以前に比べて大幅に削減され、小笠原藩と細川藩からの布施米は 300 石程度であった。そこで英彦山山伏は九州各国だけでなく、海を越えて周防・長門国（山口県）や伊予・讃岐国（愛媛県・香川県）まで回国をして檀家を増やすことに努めた。英彦山修験道が崩壊する寸前の明治 7 年の記録を見ると、英彦山の坊舎が持つ檀家総数は 346,209 軒であった。江戸時代の最盛期にはもっと檀家の数は多かったと推測される。山伏達はこうした檀家を回ってかじきとう加持祈禱を行いお札を配ってお布施を受け取った。また、各坊舎には秘伝の薬があって、山伏は薬の販売も行っていた。研究によれば、檀家から上がるお布施の総収入は七里四方の寺領を持っていた時代よりもはるかに大きかったという。



山伏の薬  
しやうよう  
(松養坊製造)

また農閑期には檀家の人々が大挙して英彦山詣でに訪れ、その宿泊に関わる費用も英彦山山伏の大切な収入であった。農民たちは村落毎に英彦山講を作り、費用を出し合って代表者に英彦山詣でをさせた。束縛の厳しい封建社会では、お伊勢参りや英彦山参りは、一生に一度の夢のような開放の時間であった。そして農民達に夢を与える場所として英彦山は機能していた。現代風に言えば、江戸時代

の英彦山は一種のテーマパークであったのである。

### (g) 明治時代～現代

幕末の混乱期には、長州藩に加担する尊皇派の山伏と、小倉の小笠原藩に加担する佐幕派の山伏に別れて、英彦山に抗争が起きた。小倉藩は英彦山に兵を送り尊皇派の山伏を捕らえ、投獄や斬首を行って弾圧した。現在庭園跡のみが残る政所坊なども、この時期に当主が逮捕・処刑されて断絶した坊である。

やがて明治新政府が成立すると尊皇派の山伏はその報復を行った。同時にその一部は神兵隊という過激な結社を作り、激しい<sup>はいぶつきしやく</sup>廃仏毀釈（仏教的なものの破壊運動）を起こした。これによって山内にある仏像・仏具・経本など、あらゆる仏教的なものが破壊され焼却された。大講堂（奉幣殿）に安置されていた丈六の仏像は打ち砕かれて燃やされ、大講堂自体も燃やしてしまえという声が上がったが、山火事を恐れて朽ち果てるに任せようとしたことで破壊を免れた。

この争いに加えて、明治5年(1872年)の「修験道廃止令」によって山伏達は生活の手段を失い、山伏や僧侶を止めて山を下りる者が相次ぎ、英彦山修験道は壊滅的な打撃を受けた。彼らの坊舎は壊されて田畑となっていた。

英彦山座主は還俗（僧侶を止めて一般人となること）して神官となり、英彦山霊仙寺は明治4年に国幣小社英彦山神社になった。その後、明治30年に官幣中社となり、昭和50年に英彦山神宮となっている。

英彦山が賑わいを取りもどしたのは、昭和十年代に始まった産業安全祈願祭である。英彦山の北麓には筑豊炭田が広がり、その北側には北九州の工業地帯があった。昭和11年の鉱山安全大祈願祭を始めとして、年々祭の規模が大きくなり、福岡県知事も出席する盛大なものとなった。しかし戦後のエネルギー革命によって炭鉱は閉山が続き、北九州の工業地帯もかつての勢いは消え、現在では祈願祭の規模は縮小されている。

また前述したように戦後一時期は、福岡や北九州の都市圏から近い観光地として大変な賑わいを見せ、夏休みには福岡市の天神から直行の特急バスが何本も運行されるほどだった。しかししだいに客足が遠のいていき、現在宿泊施設はわずか1軒になってしまった。

おそらく長い歴史を通して、英彦山の人口が最も減少したのは今この時であろう。今後の英彦山がどのような歴史的展開を見せるのか、今のところ誰にもわからない。しかし人間の営みは消えても、悠久の山河は昔のままの姿を我々に見せてくれる。英彦山に分け入り、心を澄ませてみてほしい。きっと先人達を感じ取った神の息吹を感得することができるだろう。

今大会で、深い森や暗い岩窟を見て遠い昔に思いを馳せ、英彦山の明るい未来を祈っていただければ幸いである。

○ 参考文献：『増補英彦山』田川郷土研究会編・葦書房

『英彦山修験道の歴史地理学的研究』長野<sup>ただし</sup> 覚 著・名著出版

『英彦山の宗教民族と文化資源』白川琢磨編・木星舎

『日本民俗事典』弘文堂